

バレーのみで長・短三和音を奏することができる ギターチューニングの考案とその可能性

寺内大輔

(2013年10月3日受理)

Devise of Alternate Tuning for Guitar which can Play both Major and Minor Triads
by Only Barre Fingering and its Practical Use

Daisuke Terauchi

Abstract: Standard guitar tunings usually defines the string pitches as E, A, D, G, B, and E, from lowest (low E) to highest (high E). There are however various kinds of non-standard tunings called “alternative” or “alternate” tunings. Recently, some alternate tunings have attracted the attention of schools and music therapy since they make it easier for a player to accompany simple songs. Based on the same interest, I devised an alternate tuning which allows the playing of both major and minor triads by only barre fingering. I believe this particular tuning has not yet been employed. This thesis outlines this alternate tuning I devised and offers various supporting methodology. I think the employment of this tuning is a good way for beginners of guitar to accompany simple songs.

Key words: guitar, songs accompaniment, support for beginners, barre fingering, alternate tuning

キーワード：ギター，歌の伴奏，初心者のための支援，バレー，変則チューニング

1. 研究の背景と目的

ギターにおいては、レギュラーチューニングと呼ばれる調弦を行うのが一般的であり、低い弦から E-A-D-G-B-E に調弦される（図1）。



図1：レギュラーチューニング

しかし、様々な目的に応じて、いくつかの弦が変則的に調弦されることもある。これらは、変則チューニング、オープンチューニングなどと呼ばれている（本論文では、変則チューニングという呼称を用いることとする）。変則チューニングの歴史は古く、ギターの前身であるリュートの時代から活用され、これまでに多種多様なものが試みられてきた（打田十紀夫 2007, pp.6-7)¹⁾。開放弦で D や G などの特定のコードを奏することができるように設定された「オープン D」「オープン G」や、レギュラーチューニングの第 6 弦を長 2 度下げて D 音にする「ドロップ D」などはその代表例である。

打田（2007）は、変則チューニングの利点として、

次の3つを挙げている。1つ目は、フィンガリングが楽になること、2つ目は、開放弦で特定のコードを奏することができるようにチューニングすることによって、全弦をバレーするだけで容易にコード・チェンジできること、3つ目は、レギュラーチューニングにはない独特の響きが得られることである (pp. 7-10)。本研究は、2つ目の利点への着目が出発点となっている。バレーとは、左手の指1本ですべての弦を押さえる指使いのことで、セーハとも呼ばれる。素手の場合は人差し指、スライドバー²⁾を用いる場合は薬指や小指が用いられることが多い。レギュラーチューニングにおいては、コードによって左手の指使いが異なるため、様々な指使いを覚えなければならないが、開放弦で特定のコードを奏することができるチューニングにおいては、バレーというたった一つの指使いだけで様々なコードを奏することができる。このことは、特にギターを得意としない人が歌の伴奏をする際、大きな利点となる。すでに一部の教育現場や音楽療法の現場においては、この利点を活かした実践が行われており、近年では、常楽知明(2011)と吉田豊(2011)による提案が発表されている。本研究では、常楽と吉田の報告の成果と課題を考察し、ギター初心者がシンプルなお歌の伴奏をすることを想定した新たな変則チューニングを考案することを目的とする。

2. 先行実践事例

本章では、前章で述べた常楽と吉田の報告を参照する。常楽の報告は、特別支援教育の現場におけるものであり、吉田の報告は音楽療法の現場におけるものである。いずれも、ギター初心者が演奏することを前提としている。

2.1 常楽と吉田の報告の概要

常楽(2011)は、長調の主要三和音をバレーのみで鳴らすことのできる方法として、オープンDのチューニング(図2)を提案している(p. 62)。



図2：常楽の実践で紹介されているオープンDのチューニング

吉田(2011)もまた、バレーのみによって三和音を鳴らす方法として、オープンGのチューニング(図3)を提案している(p. 67)。常楽の提案と異なる点は、和音構成音の第3音を含んでいないことである。



図3：吉田の実践で紹介されているオープンGのチューニング

2.2 常楽と吉田の提案したチューニングの長所と短所

ここでは、常楽と吉田の提案したチューニングの長所と短所について考察する。

長所として、左手の指を常に同じ形(バレーのみ)に保ち、それを平行移動することによって、様々なコードを演奏することができる方法を提案した点が挙げられる。レギュラーチューニングでの演奏では、演奏しようとする曲に用いられるすべてのコードの左手の指使いをマスターしなければならないが、この方法であれば、左手は常にバレーに保っているため、ギターの演奏技術の乏しい者にとって有効である(なお、バレー自体、ギター初心者には難しい技術のひとつであるが、このための支援については後述する)。

一方、短所としては、長三和音と短三和音を区別して奏することができないことが挙げられる。常楽が提案しているチューニング(図2)では、長三和音しか演奏できないため、長調の主要三和音しか登場しない楽曲では問題はないが、それ以外の和音を含む楽曲には対応できない。特に、マイナーコードに対応できないことは、演奏できる楽曲を大幅に限定してしまうことにつながる。また、吉田が提案しているチューニング(図3)では、和音の根音と第5音のみを発音するため、和音の長短にかかわらず演奏できるものの、第3音を省いているために響きそのものが空虚になってしまう。

筆者は、ここで述べた長所と短所をふまえ、バレーのみで長三和音と短三和音を区別して演奏することのできる変則チューニングを考案した。次章では、その詳細を報告する。

3. バレーのみで長三和音と短三和音を区別して演奏することのできる変則チューニング

本章では、前章で述べた先行実践事例をふまえ、筆者が考案した変則チューニングについて報告する³⁾。

3.1 考案した変則チューニング

筆者が考案した変則チューニングは、バレーのみで長三和音と短三和音を区別して演奏することができることである。考案に際しては、和音の長短を決定づける和音構成音である第3音に着目し、それらを開放弦のままでは区別して弾くことができるよう、長短それぞれの第3音を遠い位置(第1弦の位置と第6弦の位置)に配するという発想が出発点となった。したがって、どの弦の位置にどの音高を配するかは、チューニングにおける基調の主和音(開放弦で奏することができる和音)の構成音を拠りどころとして決定していく。各弦への音高決定の手順と留意点は、次の通りである。

(1) 各弦への音高決定の手順

- ① 基調を決定する。基調の主和音が、開放弦で奏することができる和音となる(どのような調でも基調とすることができるが、ここでは、F調を基調とした方法について述べる。開放弦で奏することのできるコードはFとFmである)。
- ② 開放弦で奏することができる和音の第3音を、長短それぞれ第1弦と第6弦の位置に配する(F調を基調とした場合、それぞれA音とA \flat 音になる)。
- ③ 根音となる音を第4弦の位置に張る。この音が全弦中の最低音となる(F調を基調とした場合、根音となる最低音は、レギュラーチューニングにおける最低音E音の短2度上のF音になる)。
- ④ 第2弦、第3弦、第5弦の位置には、根音と第5音を配する。この時、第1弦～第4弦の4つの音によって構成される和音と、第3弦～第6弦の4つの音によって構成される和音のそれぞれに、根音と第5音の両方を含むようにする。

(2) チューニングの際の留意点

- ① 第1弦～第4弦の4つの音によって構成される和音の音域と、第3弦～第6弦の4つの音によって構成される和音の音域が、ほぼ同じようになるよう設定する。
- ② このようなチューニングを実現するために、通常とは異なる太さの弦を選ばなければならない。

レギュラーチューニングでは、第6弦の位置から第1弦の位置にかけて弦の太さの順に張るが、このチューニングでは、第6弦から第1弦にかけて順序良く音が高くなっていくわけではないため、それぞれの高さにふさわしい太さの弦を張る必要が生じる。

結果、各弦の位置に配する音、用いる弦の太さは表1で示した通りとなる。このような設定によって、第1～4弦の付近を弾けば長三和音を奏することができ、第3～6弦の付近を弾けば短三和音を奏することができる。F調を基調とした場合、開放弦のまま、FとFmを区別して鳴らすことができる(図4・5・6・7)。

表1：F調を基調とした場合







弦の位置	音高	和音構成音	用いる弦の太さ
第1弦		第3音 (長三和音)	第2弦 (B線)
第2弦		根音	第1弦 (E線)
第3弦		第5音	第4弦 (D線)
第4弦		根音 (最低音)	第6弦 (E線)
第5弦		根音	第1弦 (E線)
第6弦		第3音 (短三和音)	第3弦 (G線)



図4：長三和音を鳴らしたい時の弾く位置
(白丸で示した位置，第1～4弦付近)



図5：開放弦で第1～4弦の位置を弾いた場合に鳴る
長三和音 (F)









図6：短三和音を鳴らしたい時に弾く位置
(白丸で示した位置，第3～6弦付近)



図7：開放弦で第3～6弦の位置を弾いた場合に鳴る
短三和音 (Fm)

ここまで、F調を基調とした変則チューニングについて述べたが、他の様々な調を基調とすることも可能である。例えば、C調を基調とした場合、表2のようになる。

表2：C調を基調とした場合

弦の位置	音高	和音構成音	用いる弦の太さ
第1弦		第3音 (長三和音)	第1弦 (E線)
第2弦		根音	第2弦 (B線)
第3弦		第5音	第3弦 (G線)
第4弦		根音 (最低音)	第4弦 (D線)
第5弦		根音	第2弦 (B線)
第6弦		第3音 (短三和音)	第1弦 (E線)

3.2 本チューニングの新規性

本チューニングは、バレーのみで長・短三和音を奏することができるという成果をもたらした。シンプルな発想ではあるが、管見ではこれまでの研究にはこうした例は見られない。

これまで試みられた変則チューニングの多くは、一部の例外を除いて⁴⁾、あくまでもレギュラーチューニングを基本とし、第6弦から第1弦にかけて次第に音が高くなっていくものであった。そうしたチューニングでは、通常とは異なる位置に弦を張り替えるという

方法は採られていない⁵⁾。しかし、本章で示したチューニングは、右手で弾く位置をふたつに分割する(図4・6)という発想に基づき、バレーのみで長・短三和音を奏するための方法として考案されている点において、新規性があると考えられる。

4. 実践のための支援

本章では、前章に示したチューニングによるギターを活用して、ギター初心者が歌の伴奏を行う際の支援を、2章で挙げた常楽、吉田が示したものも含め、4点挙げる。

1点目は、バレーのため補助具を使用することである。バレーは、初心者には困難な技術である。すべての弦を指1本で押さえること自体が難しく、また、これを連続して行うことによって指に痛みを感じてしまう。このことは、先行実践事例においても意識されており、常楽は、スライド奏法に用いられるスライドバー(図8)の使用を、吉田は、自らが考案した皮革製の補助具「セーハアシスト」⁶⁾(図9)の使用を提案している。こうした補助具の使用によって、バレーが容易にできるよう工夫されている⁷⁾。どちらも支援として有効なものであるが、次のような問題点もある。まず、スライドバーは、重く、硬いため、弦を押さえるのがやや難しい。「セーハアシスト」は、革で作られているため、スライドバーに比べ、程よい軽さと柔らかさがあるものの、2013年9月現在、全国で1店でしか取り扱われておらず、またその単価も安くはない(1個2100円)。そこで、市販のホースに切れ込みを入れたものを用いる(図10)⁸⁾。これは、「セーハアシスト」と同じく、程よい軽さ、硬さがある上、ホームセンター等で安価に入手することができる。



図8：市販のスライドバー



図9：吉田が考案した「セーハアシスト」



図10：市販のゴムホースに切れ込みを入れたもの

2点目は、各コードの位置をわかりやすくするための支援である。常楽(2011)は、目当てとなるコードの位置をわかりやすくするため、ギターのネック部分にシールを貼っておくことを提案している(p. 62)。この支援は、前章で示したチューニングによる実践でも大変有効である(図11)。



図11：ネック部分にシールを貼ることによってコードの位置を示す。

3点目は、右手の奏法に対する支援である。右手は、通常、指先で奏するか、ピックを用いて奏するかのどちらかである。しかし、吉田(2011)は、小さなピックを軽く握って奏することが困難な奏者のための支援として、しゃもじにピックを装着することを提案している(p. 99)。この方法は、本間知子(2009)の障害者を対象とした実践においても試みられており、持ちやすく、ストロークが安定するといった成果が報告されている(pp. 4-5)。筆者も試してみたが、しゃもじだけでも格段に弾きやすくなることが実感できた(図12)。



図12：ピックの替わりにしゃもじを持って奏する。

4点目は、演奏姿勢に関する支援である。吉田(2011)は、通常の姿勢で演奏することが困難な場合の支援として、大正琴やスティールギターのように、ギター本体を横に寝かせて置くという方法を提案している(p. 97)(図13)。この支援は、前章で示したチューニングによる実践でも大変有効である。



図13：横に寝かせて奏する。

5. 成果と可能性

本研究では、ギター初心者のための簡易な伴奏の方法として、バレーのみで長・短三和音を奏することができる変則チューニングを考案することができた。考案のプロセスにおいて、筆者はギター未経験者・初心者数名に試奏を依頼したのだが、誰もが短時間に困難なくいくつかの曲のシンプルな歌の伴奏ができるようになった。

この成果は、様々な現場における活用を期待させるものだが、その一つとして考えられるのが、学校現場における活用である。学校現場では、音楽科の授業はもちろん、その他の諸活動(例えば朝の会、帰りの会、様々な行事など)において、歌の伴奏が必要とされる場面が少なくない。ギターを得意としない人でも容易に伴奏ができるということは、諸活動のあり方の可能性を大きく広げることにもつながるだろう。今後は、本研究成果の活用の可能性を、現場での実践とおして模索していきたい。

【註】

- 1) 四月朔日義昭(2011)の著書や、Bill Sethares(2011)のウェブサイトには、多種多様な変則チューニングが紹介されている。
- 2) ボトルネックとも呼ばれる。
- 3) なお、本章で示している変則チューニングは、すべて右利きの奏者を想定したものである。左利きの奏者の場合は、第1弦～第6弦の位置をすべて逆(対称)にする必要がある。
- 4) 例外のひとつとして、Nashvilleチューニングと呼ばれるチューニングが挙げられる。これは、4～6弦の低音弦の位置に1～3弦用の弦を張り、それらの弦をレギュラーチューニングよりも1オクターヴ高く調弦するチューニングである(四月朔日2011, pp. 212-217)。
- 5) 20世紀以降のギター作品の中には、特別な効果を意図して、通常とは異なる位置に弦を張り替えることを指定している曲もある。例えば、鈴木治行作曲《Souvenir for guitar and piano》(1996)では、ギターのパートにおいて、第1・2弦の位置に第1弦を、第3・4弦の位置に第3弦を、第5・6弦の位置に第5弦を張るという調弦が指定されている。
- 6) 「セーハアシスト」は、「レザーストップ・フィドラー」(大阪府堺市北区中百舌島町2-299-3)にて販売されている(吉田2011:p. 69)。

- 7) 吉田の具体的実践内容については、その一部の動画がウェブサイト『かんたんギター奏とギター・セラピーのブログ』で公開されている。<http://blog2.mf-mandoro.net/?pid=01> 2013/9/5参照
- 8) これは権藤敦子による提案である。

【引用文献】

Sethares, Bill *Alternate Tuning Guide* <http://sethares.engr.wisc.edu/alternatetunings/alltunings.pdf> 2013/9/5 取得

- 打田十紀夫 (2007) 『プレイ・オープン・チューニング・ギター』中央アート出版社
- 常楽知明 (2011) 「合わせて楽しい! 器楽活動」『教育音楽・小学版』2012年9月号, pp. 62-63
- 本間知子 (2009) 「ギターの弾き語りは『かっこいい』～かんたんギターの二人三脚奏から生まれた歌い奏での意欲」『紀要』20, 大阪府障害者福祉事業団, pp. 1-8
- 吉田豊 (2011) 『開放弦でできる実践ギター・セラピー～かんたんギター奏で始めよう』あおぞら音楽社
- 四月朔日義昭 (2011) 『実践オープンチューニング事典』自由現代社